

パネル討論会 ② 「『もったいない』から始めるエコ・アクション」

日時 2008年6月15日(日) 13:30~16:00

場所 天理市文化センター

パネリスト：玉田真人氏（大和ハウス工業株式会社本社技術本部 環境部長）
三木武夫氏（シャープ(株)研究開発本部天理環境安全推進センター長）
辰谷直子氏（市民生活協同組合ならコープ常任理事）
津田八重子氏（リサイクルクラブ天理代表）
山本 一氏（循環資源利用健康推進事業LLC統括責任者）
長谷川佳孝氏（天理教営繕部造園課）

コーディネーター：妹尾和夫氏（ABCラジオ パーソナリティ）。
劇団パロディフライ座長。天理中学・天理高校卒業。
モットー・座右の銘は「全力投球」趣味・特技は野球観戦、
ゴルフ、パチンコ、ラグビー。



妹尾和夫氏。



「地球規模で考え、地域の中で活動する」。この言葉は、20年以上前から世界的に広く言われ続けてきたが、やっと近年になって、その実践活動が日本の社会で認められるようになってきた。若い人たちにエコ意識が高まってきたことは、この10年余りにわたる社会や学校での環境教育が奏効した結果かもしれない。

また、新聞各社は「エコ」に関する実践記事を頻繁に紹介したり、企業各社はテレビや新聞広告の中で自社の「エコ」実践例を頻繁に宣伝するようになってきた。さらに、タレントや芸能人によるチャリティーオークションの収益金を途上国の学校建設の支援金に使うなど、貧困緩和対策への「利他的活動」が社会で増えてきたことも、見逃してはならない現象である。

このパネル討論では、「『もったいない』から始めるエコ・アクション」をテーマに、身近な「エコ」な実践例をさまざまな視点から討論した。

●玉田真人氏

温暖化による様々な影響が世界各地で顕在化しつつあるが、温暖化は人間の活動によってもたらされた可能性が非常に高いと言われている。まずは、自分たちに何ができるのか、将来を担うこどもたちに豊かな社会を引き継げるようにするために、私たちは、今なすべきことをしっかりと考える必要がある。



重要なことは、我々の意識を変えていくことではないだろうか。

日本には古来より「もったいない」の心があり、物を大事にしてきた。いつのまにか忘れられつつある言葉だが、「物（自然を含む）を大事にする」という気持ちがあれば、それはエコだとか環境配慮につながるように思う。また、「本当の豊かさとは何か」を考える必要がある。モノが少なかった昔の暮らしは今ほど快適な生活ではなかったかもしれないが、精神的な豊かさという観点では今よりも豊かだったかもしれない。

住宅を建設してから居住、解体に至るまでのCO₂排出量を見ると、居住段階が最も大きく、全体の約7割を占めている。住宅は一度建設されると長期にわたって使用され、長期にわたってCO₂を排出することになる。従って、新築段階で省エネルギー性能を向上させ、CO₂の排出量削減を図ることが重要であり、大和ハウス工業では省エネ性能の高い住宅や太陽光発電システムの普及に積極的に取り組んでいる。

●三木武夫氏

シャープは環境取り組みとして、「2010年、地球温暖化負荷ゼロ企業」を目指している。グローバル事業活動として、当社は、当社が排出する温室効果ガス排出量を当社が販売する太陽電池で得られる発電量と当社製品の省エネによる温室効果ガス削減量で相殺することによって、低炭素社会を実現する。そのため、当社は「スーパーグリーン戦略」を全社に展開し、環境負荷低減の取り組みを推進中。



社会への働きかけとして、気象キャスターと一緒に全国の小学生を対象にした「環境出前授業」を実施している（年間500校を予定）。また、企業市民としての地域社会貢献活動として、「シャープの森」への取り組みをおこない、生産事業所及び社員数が多い拠点の都道府県を選んでこの取り組みを展開中。

地域の美化活動を各事業所単位で実施し、工場見学会も事業所ごとに実施している。堺市守屋池をきれいにする活動を展開し、微生物の力と太陽エネルギーで環境にやさしい浄化活動を展開中。

●辰谷直子氏

ならコープは1974年創立以来、「よりよい生活は、平和とよりよい環境の中でこそ実現する」と考え、それをすべての活動の基本と捉えている。

1979年、マイバッグ持参運動を開始。組合員運動として、「買い物に行くときは買い物袋を持って行く」ことを展開。1982年、4番目の店舗開設時に、地域の組合員からの提案で、ならコープのオリジナルバッグを作成。それと同時にレジ袋を有料化。

また「5円募金」を始め、集まったお金を環境資金として活用。80%台の高い持参率を常に維持。地球温暖化が深刻化する中、2007年度は全10店舗で持参率90.5%にアップ。レジ袋削減数は約576万枚、原油削減効果はドラム缶約593本分。



2005年度からは環境資金の新たな活用として、県内で活動する環境保全団体への活動助成を開始。

2006年度からは菜の花エコプロジェクトを開始。NPO団体の協力で、菜の花栽培や店舗から出る廃食油の回収とバイオディーゼル燃料化の推進。2007年7月には奈良市内の配送センターにバイオディーゼル燃料タンクを設置し配達トラックで使用。2008年4月から家庭からの廃食油の回収も開始。生ごみとして捨てられる使用済みてんぷら油を軽油代替燃料の資源として活用。

●津田八重子氏

環境教育を視点とした人形劇を上演。幼少時からの環境教育を目的とした人形劇（「たぬきの国がたいへんだ」、「だいじょうぶ？だいじょうぶさ」）を、市内の15の幼稚園と保育所等で上演。また講演案内のチラシを作成・配布し、その活動範囲を市外にも広げている。

ごみ分別についての学習会を実施。日常のごみ分別について、クイズ形式の学習会を実施し、分別回収への理解促進に取り組む。（幼稚園等で保護者も参加。年6回程実施）

また、リサイクル工場見学会を開催し、資源ごみ回収後の行方を学びながら、参加者のリサイクル意識高揚に取り組む。

山の辺の道でごみ拾いハイキングを実施。毎年5月、山の辺の道において「ごみ拾いハイキング」を実施。また紙すきの実演・指導も行い、折込広告を利用した紙すきの実演・牛乳パック工作等を指導。（年2～3回）



●山本 一氏

以前、私は石川県加賀市内の会社で、食品リサイクルに用いる車載式処理装置（「車載型食循環資源処理装置」と私が命名）の開発スタッフをしており、機器の改造と独自の有機堆肥生成方法を用いたシステム構築の開発を手掛けていた。そして、奈良から視察に来たグループから、奈良でのシステム構築を依頼され、社会貢献と安全・安心な野菜づくりのためならということで承諾し、こちらへ来ることになった。

数社の協力と支援によって、現在は食品リサイクル・ループの完結を構築し、実践している。ループの完結は、地産地消、フードマイレージ(CO₂削減)、食料自給率の向上、循環型社会の形成、地域活性化、幅広い社会貢献を意味している。

現在、安全・安心農産物流通グループ「サムズ」を立ち上げ、独自の有機堆肥を用いて生産された農産物を、県下のスーパーや飲食店、また関西圏のイトーヨーカ堂などの店頭において直接販売している。



●長谷川佳孝氏

天理教には、あらゆる物（神様からの与え）に対して感謝し、物を粗末にしないという教えがある。食べ物に対しても、「命をいただいている」という事を自覚し、決して粗末にせず、慎みの心を忘れずに食するという考え方である。また、「もったいない」の言葉の意味には、“感謝の意”を含むと、いう事の自覚が必要である。

天理教としての環境対策への取り組みは、天理教教会本部の炊事本部で使用した天ぷら油を精製し、それを配送用ディーゼル車の燃料として使用していることである。いわゆるBDF（バイオ・ディーゼル燃料）として食用油の廃液をバイオ燃料として活用していること。さらに使用する紙の両面使用（リユース使用）を常態化させ、剪定枝をチップ化して肥料・土壌改良剤として活用。施設内では、省エネパトロールを実施し、冷暖房の温度を適正管理している。

